西洋雜記 古写本六冊 もうしの西洋の說

洋学文庫
文庫8
C 310
1

西洋雜記卷之一

目録

世界開闢の説　洪水及聖人諾尼の説
罷百尓の高臺の説　西洋古今四大君の説
罷皇落尓亜英百尓西亜の二大君傳統の説
厄勒西亜國大君の説　邏馬国大君の説

卷之二目録

西洋中興革命の説附諸国年号の説
「ヘブレウス」の少年史中に入て賛けざる説

LINDTO

天より項奪馬四匹燒く說及び項奪馬異
草の說及西洋諸國男色を禁ずる說
茅索祿斯王の堂の說
「アレキサンデル」大王諸將に寶物を賜ふ說及
乞兒に千金を施す說
公斯璫丁帝空中に十字の形を見る說
主教械を以て逆賊雷霆に擊ちたる說
「カアレルゴロカト」帝邪魔の祠を毀ける說
邏馬銅甲の說　聖人摩瑟の說附其露密

の記
亞尔幾墨得の說　厄勒祭亞四名畫の說
入尔瑪尼亞に異獸を獲たる說　天下の奇女と云說
和蘭四方海中の女人を得たる說
波尔杜尼尔の讖記の說
伊斯把尔亞の人呂宋國を奪ふ說附「ニ」并りユ
ス」の女王「カルタゴ」の城を築く說

巻之三目録

西洋曆法の說　西洋天文の原始

西洋上古鬼神の説　西洋の畫と譬諭なす説
亜細亜亜弗利加の像の説
「キリツヒラレ」の説　弗尼思鳥の説
稀沒辣山の異獸の説　「セ井レ子レ」の説
馬哈默乃説
日月地神とす説

巻之四目録

冠羌「トルハンド」の説　入尓馬泥亜国の帝王傳
四の寶器の説　西洋諸國乃名義の説

依蘭地國羌「クムス嶋の説　印度の人蛇地咬乃説
「キルギツセレ」國の説　「エツセドン」国の説
小人國羌小人鳴附「サモエデン」諸国乃説
犬馬諸獸歳地經るとりくも法以て小なる
こと初生乃時の如くなるもの説
「カンキユツト」国の説　亜弗利加洲異形人の物の説
大莫臥児国および邏羅国の尊號乃説
羅四羅國の説　工鄂國乃説
「アントロホハアジイ」諸國の説

入尔瑪尼亜国鬼城鬼塔の説
匂攝黎亜国都城の説　鐵門関の説
「ゲロカ子」国の説　「ガツリユス」河の説
莫可汝国の説　多角鳴の説
那波里国石穴の説　「ゲ井ム子エテ」国の説
長生不老不死の王らふ説

巻之五目録

風鳥の説　「カナアリヤ」鳥の説
墨是可国大鴉の説　印度国小鳥の説
南亜墨利加の大鳥の説　地生羊の説
海牛の説　「アゲムナ井ム」獣の説
亜墨利加の異猿の説　「ドゼアルス」鳥の説
白孔雀白雞白猩白熊白鯨の説
印度の異木の説　鉄島水樹の説
大懶毒辣虫の説　「アダムス・アップル」菓の説
「オポッセユム」獣英「セミヒュルバ」獣説
免英免牙の説
亜弗利加の大獣の説　「アリウハ」獣の説
伯西児の大蟹の説　水蛇英水蛇石の説

雞石の說

巻之六目録

西洋言語の說　「ヘブレラス」文字の說
「アブラサダブラ」の符咒　血劇を熱病に除く方
硝子に藥ぬする法　屋室を攝養の說
西洋痢瘡の原始　西洋産婆の說
氣及風を造るの說　西洋讃詠の說
藥に肢ちすして飲食に出しむる方
薔薇にして香氣あらしむるの法

印中に文字を書す法
石上ふ文字をなせ法　黄金の量に產しむる法
猩々紙をもる小出の說
「コラデヒツス」の說
エンガン鄂國の異鳥の說　則意菓國の異草の說

慶應義塾図書之印

西洋雜記巻之一

小東洋　夢遊道人　筆録

夢遊漫筆　第二十一

慶應義塾図書

予近年志ヲ西洋ノ学ニ興シ磐水先生ニ従事シテ其讀書譯文ノ法ヲ習フ既ニシテ先生ニ侍スルノ間或ハ其語路文義ヲ問ヒ或ハ彼邦俗事狀ヲ問ヒ又或ハ彼書ヲ閲スル毎ニ間々奇説ヲ得ルヿアレハ則コレヲ懐中ノ小紙ニ録セシ者亦後歳月ヲ經ルニ隨テ筐筥中ニ充盈スコレニ因テ頃日コレヲ淨寫シテ其讀書文

義語路等ニ係ル者ハ別ニ一編トナシテ以テ
彼邦書ヲ讀ム時ノ考證ニ備ヘ此ニハ其記
事奇談雜技物産等ヲ記シ各テ西洋雜記
ト云フ實學ノ用ニ中ラズト雖モ或ハ以テ
聞見ヲ資クルニ足ラス字然レモ予カ短才
淺學ナル記ス所深ク謬誤アラシヲ怕ル
敢テ君子ノ覧ニ呈セントニハ非ス惟筐藏
シテ以テ予ガ遺忘ニ供スルノミ 享和改元秋
八月朔旦記

世界開闢乃說

太古の世ヨ造物主をでふ天地ハ造有して
のち人の始祖男女二人ハ造まてこれハ「ハラデ
井ス」の地ヨおく甚所居ハ歸して「エデレ」ニ云
ハ樂園ヨ地堂良和乃処とふられなり
きく西書ヲ按ずるヨ「パラデイス」の地をいまれ
亜尔墨尼亜ハ帝曷尔伯祈ハ歐法瞞得
河「チキリス」「タラロス」山等の間なるとと

「ヘブレウスの語太古一種の方言なり」にて「バルテス」といひ「キリイキス」なり語るといひ「パラデイサリス」とりふなり

その男は亜當（アダム）とりふ　女は厄（エヴ）襪とりふ

一あいを造物主天地は造成して後ふ二塊の土は博成して此二人の形は造る万民の始祖となりたれ人死まれい復元の土よりかへ

風の義は明せるものなるとられい今の神なる者と自ら名乗る者

故乃雖ても私意は以て上古乃事入理を附会そ乃地まで

もるよ同じくしてけ就最怪誕あるべし

氣候融和にして人疾病なしまた夏暑なし

天まことにたゞ水流の流は分て四の大河となりて美魚多し

これ今乃安日河（ガンゲス）「ナキリス」河印度（インド）河（一名ヒセント）政法（エウフラト）曜得（ヒスト）河の四なりとこうれば乃

「ハラデイス」の地今の東印度（インド）の地に及べるに

やまこと地理乃書に印度の南海則意蒙

島の中に「アダムス・ハレク」とりふ地ありを相伝ふ

是古亜當（アダム）居をし所乃地なりとなる洋な

らす

まく清陰義景所なりて人なしして憩息せしむる
よ宜しくその他五穀百草美味乃物ありて大地自
然よ生成して絶て人力を労せず鳥獸と群を同
ふすとりくども鳥獸らも人の命を聽て敢て人
ゐ害をなすことなしまうるよ年ゐ歴て邪魔
虚を伺て慢心漸く生し
一ゐいたく怠惰よ憩息をなし一箇の大樹の上
ゐ曽て一蛇乃迴繞をなゐ見る敢て意とな
さず此蛇いかち邪魔の変化せるものよし

てその虚をうかがいて驕慢の心を生せしむ
厄禍が言にて亜當もまく天の教戒をそむき
共よ罪咎造物主ゐ得たりうれよりして地気更変
して五穀生しがたく鳥獸害なし生老病死
飢塞の患なを免れず男子にそその耕田の労苦を
罰し女子ゐそ乃生育の艱辛を罰すこて
ゐ為て亜當自ら耕田乃器なを造りてその衣食
をいとなみ始く火食なを知るまく木を伐て屋

城遠を以て寒暑を避け危機生ぜ不乃子多き
中に其第一子城「カイン」といひ第二子城「アベル」とい
ふ此二人乃世にいでて始めて城邑城建て乾
と居を「カイン」を王乃始となりて故化を旅し
人類次第に蕃息す此時人壽皆長し數百歳
故佛説者少かり壽

一ゆいを〳〵亜當をそ乃壽九百三十歳ありと
これより以後の事狀城四ツに分て「コウド」「シルヘル」「コ
オペル」「エイセル」の四「テイド」と號す「テイド」を時代又時代の壽ちり

これ金銀銅鉄の四ゆ配して時代を分ちあり
者ゆへて人間日用乃諸器財乃至樂器の類
まても多くハ此時代の内より造ゆセりとい
ふ

洪水爰聖人諸虎の説

洪水ハ今祢して「ワシント・フルウド」といふ上乃
いふ「エイセル・テイド」の世の末にいたりてもゆ
なち西洋紀基第一千六百五十七年なり此時
聖人諸虎ある者ゆを「ラメキス」といふ人の子
なりこれよりさきに天の告によりて預めけ

事城吊知して一ツの極めて大なる匣を造る
其制恰も船の如くふして衆の人容るべし
上下四面ミな固案にこれ塞ぐ各けて「アル
ク」とり（物にたとへられ今りの舟の形なり）是歳の二月十七日（今の西洋の四月なりと記せりなるべしこれ太古「ヘブライ」の暦法なり）水洪の出川世時密雲遍く布き
猛雨やまぶ降る凡そ四十晝夜地面全没して水
諸山の頂城霞ふ城邑人民きべてなくなる者なし
ミに於て惟諾（アク）尾を其妻おらびミ人の子二人の
媳共ミ其家人等ミ共ミ器財食物書冊等を以

て悉く其大匣ニ入て波の来るまゝうゐて飄流す
第七月の二十七日城以て亜尔墨（アルメニ）泥亜（ニア）山（ヒロス）の乃「メウ」
を至る止る此時天晴て始て虹霓を見る
ものなきち相ちに匣城いで山頂に登望菓城
採くこれを食してミる命を全ふす彼洪水を
凡そ一百五十餘日ありして收まれるこれ以後の
事城「テ左エ左。左エレルド」（尹二の世界ミいふる説）「左エレルド」（新世界ミ云る説）ミ號
のミな活くして子孫城生ず人類再び生育し

て新に一世界をなすうかなり諸尾をでに存法
して天の恩恵射して始めて「アルタアル」神前なる草
を作り義香を焚き拜祀すこに於て百草
木翕獸蕃息すなわち葡萄を釀し始め
て酒を造る諸尾の三人の子を少子を「シヤ
ム」といふ最聖德行ありシヤム」の諸子乃内に「カナア
ン」といふ人まづ聖人にして始めて如德亞を開く
故に如德亞の古名を「カナアン」亞といふ
「セム」とりふ此三子い則ち彼邦萬姓の祖なり

再按ニ「アルタアル」ハ火ヲ燈テ天ヲ祭ルの基ニ

入尔馬泥亞を開基もたる人「アスケナス」とりふ人を
乃ち「ヤヘット」の孫なりとりふ

按もるに「ヤヘット」の子を「コメル」とりふそ乃子を
乃ち「アスケナス」なりこれ絶「ムスコヒヤ」那瑪
尔加拂郎察是的亞等西北諸亞をこふ「ヤヘ
ット」の子孫ときを開き亞細亞西南諸亞をこ
ち「セム」子孫ときを開けりとりふ

如德亞國の大聖人亞比剌拉ハ「セム」の玄孫

按もるに魯西亞本記に云「ヤヘット」の第八子を「ルツシユス」とりふその居る亞を魯西亞とりふ又「ヤヘット」の子に「メセツト」とりふ「その居る亞を「ギスリロ」とりふ魯西亞後世その地に都す故に總ての馬を莫斯哥起亞とりふ

「セム」の子を「セリユス」とり其子を「ナホル」の子「テラフ」その子ハもるち亞把剌拉もり世々これを「アールバハアドル」と稱す

其匝中所藏の書をこふ「ヘブ」ラス」の文字を以

て記〳〵たるを乃に〳〵て後世の人大聖人義琴なる
今を去ること三千三百年前の人と　これ総修書〳〵て今世につゞくたり
按ずるに「ヒズ子ルス」人名の葛函傳信記事のごとく
亜尔墨尼亜函に高山何里「アラヤト」とゝふ百児
西亜函乃「エリハシ」城を去ること遠こゝ〳〵ば
これ上古乃聖人諸尼「アルク」上古云つ舟洪水の時
こゝふ止りて暫〳〵居りし所あり今に至て當
時乃遺跡尚存ずるなり亜尔墨尼亜等
諸国乃人これを称して聖蹟とし恒乃此山

か登ることを乃遺跡を称禮をとゝふ又こゝ
按ずるに上にいふ「タウロス」も極て大山にして
て「アラヤト」をその山の内にて一処乃名と
又按ずるに洪水乃事を物理に識みいたゝく
天地開ク時初有リ水荒一云云大西言フ洪水ノ時ニ
亜尔墨尼亜ヲ為ル甚ト猛ク雨四旬ヲ地面全ク没シ止
遺諸尼等ノ数人ヲ考ニ其時ヲ當ルト帝ノ嘗ノ之八
年壬辰ニ云フ中国ノ洪水在ニ竟ノ時ニ是一徴也云云
罷皇尔の高臺の説

太古の世を人類穴居して言語なく「ヘブレウス」の一種のみ洪水の後より生じて機智漸く生じ人心奇異を好むあまり「シヲアル」「アッシユル」等諸部の酋長等相議して「シヲアル」の平地に於て大に土木の工を興して極て高大なる樓臺を建て天降を窮めんとし諸酋會議して工を監して漸く數十層を成に及ぶて天を傲慢の志を憎みて忽ちその諸人の語音を種々乱に言語相通じ難く

彼此紛雜して工を成ることを得ずして各退散して臺遂に成らざるこれ諸国語音を異にするの始なり其臺を建ゆるの地を「ヘブレウス」の語にて罷(バル)臭(ベル)ふとふふるを和蘭語に翻譯すれば「ツル・ワルソンギ」とり〳〵原事にてなるなり乱とい〳〵原義なりこの臺の遺址を今の百児西亜(アシ)の「オウド・バツクダウト」とり〳〵原城の傍にありて歐法(エウフラト)瞰得河を去ること一里四分の一日本の里なり

按するに以上の諸説を蓋し彼邦乃古書に載る所りてその説或ハ巫祝ゐ近く〳〵
厭ふべきを乃ち西洋の俗臆説をあを
ことなるき風なるよりて姑〳〵傳記ゐ因て
これ故記もの〳〵

按するに上古の事蹟故記すも乃ハ唐土・日本・朝鮮・琉球・天竺・波斯すべて怪誕ゐ
きハ〳〵西洋ゐてもけ外地中海乃「セイラ」とゆ島ハ太白
星乃神海泡を記〳〵て地となすとゆ又「シセリア」島ハ其初ハ
形貌きもめて甚大なる一種乃異人を以て群を成〳〵他邦の
人を反食ひ〳〵を歳乃星乃神を以て祭げて乃ふゆとゆ人民
を造れりなどゆ
ゆ数多〳〵

西洋古今四大君乃説

西洋上方より今乃いたるまでの帝王治革称し

て「セイル・モナルク」とゆふこれ四ゐ大君といふ風乃
なり乃一ハ罷皇落（ビロ）伊亜（ニア）西洋開基千百十七年より三千
乃二ハ百児（ベル）西亜（ア）西洋開基三千四百一十年より三千
六百二十年にいたる　乃三ハ厄勒祭（イキス）亜西洋開基迄千六百二十年より三千九百
零二年より今に至る六百九十年なりとゆふ　乃四ハ羅馬（ロマ）
西洋開基三千九百零二年より今に至る六百九十年なりとゆふ
相つぐ乃千八百四十年なりとゆふ　此四代の世系
沿革治乱興廃乃事を西洋乃史書ゆ載るところ頗
る詳悉なり今所〳〵とを乃大要を採て左に
これ故記して以て考證ゐそなゆるのそ

羅皇落你亜百児西亜の二大君歴代傳

説の説

西洋開基後最初の帝王も羅皇落你亜なり

此國一名「バビロニイン」又名「アッセ井リア」又名「カルデア」といふ今乃百児西亜・亜尓墨泥亜帝昌尓伯祈「エイラク・アラビイ」等の地なを乃屬國たるゆへに地方極て大なり初め聖人諾尾の第三子「シヤム」洪水の年歳以て其子「キユス」を生む一云曰く「キユス」も「シヤム」の孫ありといふのもあるなれども

是すなわち歐羅巴の中興草

命の年歳去ること凡そ二千三百二十七年乃なり是

「バビロニア」あらび黒人諸国の祖たり「キユス」西洋開基

乃一千六百八十二年歳以て鎮星乃神の保護よりて

「アッシリア」の地歳開拓も其子「ニムロド」の世に至て

諸部歳臣服して「バビロニア」国の大業を開げ是これ則

ち西洋開基第一千七百一十七年なり或曰く供乃後三百七十六年と西歳開く

に或をいへ「ニムロド」一名「ベリユス」と号すに或をいへ「ニムロド」と「ニムロド」

「ベリユス」をふ人ありとそなを詳あるる乃歳とぶ

才徳ありて国人由敬を立位六十三年のして位歳

其太子「ニニユス」に伝へ「ニニユス」殂して其后瑟彌

辣未斯（ウミ）位を嗣ぐ後に印度（インド）およびモラレン（黒人の總称）の諸国と戰ひて皆これを降す西洋全史より戰のありさまを載るなり

玉土城周坏し盛德日に豎なりなほ昔時天より降りて人の言語城乱したる罷（ビル）巣（ビル）の地に於て大なる土石の土城興して大都城城築く名付て巴必（バビロン）といふ漢訳まち〳〵地彼乱につくる其周廻おのおの三百六十八「スタデイエン」はまの西洋の四十里かねなるを精石を以て墻となしその厚さ三丈二尺餘高さ十餘丈まはりその間に二百五十餘処の高臺ありこれ皆高さ二十餘丈歐法（エウフラト）腕得河と

「チギリス」河乃流を引て大湟となしその湟甚廣くして舟をうかべしめ城樓の上に花園山あり諸景ありてその廣大美麗なること世界七奇の第一とす瑟彌（セミ）辣未（ラミ）斯（ウス）狙して其太子「ニ子ナアス」位城嗣くこれを子孫相嗣て西方の大君たりしが城傳ることこと二十四世ありて一千三百餘年を経て一説五十五年と作る按するに此世數を年數に比すれば世数やゝもくちきに似たりあるいは上古の多蹟今遺漏なるべしかれども「バビロニア」の史書なりて西洋全史これにより記すことなれども世數の多きを諸王の内よりわかち数に入るといふさるなりを為迂〳〵考へべし

「サルダナ・パリュス」王一ふ「トノスココロス」とも の代

にいたりて皆愚にして淫荒なる怨うらみ德衰へ政まつ
たき國人怨み叛き干戈邦内に起りて戰爭絶
まず國主乃別都「こゝへ」城を昔しその第二世の
主「ニニコス」の建る所の美麗なる大城なるしが「ニニヘ」
城も「チギリ」川の邊にあり これも兵火に燒失し邦内分裂し
遂に羅皇落你亜と黙丁と二國となりて王業
衰微せりこれ則ち西洋開基第三十零七十七年
乃事なり（唐土周の厲王の八年庚寅なり）其後此國王再び祖業を恢
復して土字城周人事城欲し大に兵を興して如
德亜國に攻入りてその西都「エルサレム」城に至
る陳營城設夢日城尅して城を攻人とに夜に至る
て忽ち一乃「エンゲル」（天人免よ羽翼なるとの）ひとり剣を以て大よ
り奉下る其諸營城擊川羅皇落你亜の軍士大
よ驚亂して甲城捨て十八萬六千餘人一時に山谷よ
星散して死する者甚多しこれよ因て西勢まち
〳〵衰へ後三百餘年にして遂に百児西亜西王「セイ
リユス」に滅ぶされすなわち西洋開基第三千
四百一十二年なる（本朝安帝天皇十三年周の景王の九年乙丑なり）百児西亜

をと默丁ょ屬す保ょ王なり「レイデア」王王「レイデア」えふ亜細亜の中に而至一名「レイシア」俗訳利細亜と化る これ昔時始て殘を遠るの地なりとす 其女「マンダナ」を以て百児西亜國王「カムベイセス」の妻ハせ因て太子玖生む名けて「セイリユス」とふこれ則ち百児西亜國興業の始祖なり「セイリユス」天資英俊みしてよゝ兵玖用ゆ「イナア」王乃内乱玖靖め小亜細亜乃諸國玖険し默丁乃王業玖纂奪して王勢日に盛なる罷皇落你亜と相爭ふこと数年ゝして志ざゝこれを勝ち地玖畧して「ケインデス」河ょ至るこれを塞ぐんとす

塞ょ水溺ゝしてその後深玖知ゝず且舟揖なし「セイリユス」ときなちち一足の白馬玖進放ちゝ水中乃以ゝ志めてこれ玖試むるふ白馬乃玖游ゝて甚速ゝして直に塞を向乃岸に登るこれょ因ゝ甚乃後ゝ多玖知まて諸軍悉ゝ塞を遂に進て罷皇落你亜の國都罷皇尓城を攻て相戰て日玖傾くを堺対城中の一臣百児西亜ょ内應す保者以乃門玖開て兵玖迎ふこれより百児西亜の兵ゝ城中に乱入ゝて遂に罷皇落你亜國主「ナボニ子デ」を擒

すてこれを殺しその王業に代りて西洋の大君
たる罷臭蕃你亜國開基より以来凡そ一千百卒
餘年にして國祚絶滅す世後「セイリユス」を尚
諸國を侮せんとす我欲して兵を興して「メソハタミア」
今の帝昌示伯祈國なり「セイリア」女王「セミレス」徳亜等諸國と
戦争やまざる甚軍中に殂して在位凡そ八年なり
一説いまく「セイリユス」王兵を以て「セサリア」を破滅す「セイリア」王の旧臣
これを怨みて「セイリユス」所屯の営を襲ひ
擊ち百児西亜の兵敗れて「セイリユス」殂す百児西亜の人「セイリユス」の
アを將て王の子「ゴルン」となす「セイリユス」殂して不可なり則ちその頸を斷て
梟せられ人血を以てこれを漫しこれを洗ふ
人の血を漫すの理甚詳なるべしこのとき太子

「カムベイセス」これ其祖父の名なり以て名を
エジプト
「ヒ」入多西王「アマシス」と西洋の俗なり位を嗣ぎ王道を
を伐ち連戦ふ勝て「ヒ」入多の國都孟斐斯城を
踏み大に殺掠を恣にす世時「アマシス」もまた死す
則ちその嘗陵を発掘して「アマシス」の「ゲバル
セムデ」の屍上古「ヒ」入多西の典禮に尊貴の人死すれば腦髄と腸
勝を抜きて棄てこれに塡て而後厚く葬
るこれ称して「ゲバルセムデ」の尸とこれ千年
を経るも形損せざるものあり洋人の物形志に見
これ我鞭うち又これをすくに切きざみ而後これ我愚かして
を焚て灰となす「アマシス」の太子ハイマグ位い我

嗣くの禍を行ひたゞ逃て他國に行人こせ〳〵ゝ
百児西亜乃兵進て擒にしてこれを殺〳〵遂に
阨入多(エヒプト)を滅ぼせるをもつて阨入多の人ハ罷臭落(ビロニア)
亜の乃始祖「ベルス」の次子「アエケイプトス」なるを乃
亜剌比亜(アラビア)回より於て「メランポデヒ」の人と戦ひ勝て
西南の地を開拓して大業を成し五十餘人の王
子ありを改て輔け阨治め子孫相續て法制礼楽
文学等ゝ全備して亜勢甚隆盛なり〳〵か
ゝに至ゝ悪〳〵絶滅して遺る所もなゝと

ゆゑに「カムベイセス」を兵を進めて利未亜(リビア)の
亜乃荒野の地より〳〵ゝを乱ひ揚て行〳〵べ
〳〵に兵士水を渇して死す者甚多〳〵これに
因て兵を收めて本國に還るこれをもつて後ハ驕
慢無道殊に甚〳〵百児西亜(ペルシア)亜中に於て土地を
有りの大酋十四人を欺き捕へ〳〵生かゝ倒り
土中に埋殺〳〵或ハ猛獸を從て人を食をしめ
或を人を樹に縛を自らこれを射殺して以〳〵
楽となす其他忍虐乃刑甚多〳〵罪なき者

地 もるに此荒地
ハいまハ「サアラ」
亜乃砂海之

を殺す勝て計ふべからざる後に「セイリア」山に於て
殺さる雄人の殺す所なる所を知らずして乃死せ
る形狀甚奇異なり蓋し天報なりとふ左位おも
よそ七年なり「カムベイセス」左位乃同子なり精
忠強烈にして勲舊至威大抵殺し盡して嗣と
すべき者なし曾て甚寡「スメルデス」殺さんとす
「スメルデス」逃てそ乃ゆゑ所を知らざる「カムベイセ
ス」死して後に忽ち「スメルデス」と称する者あり是
が便宜なれば見るに其形貌なほ異なるもの

抽するにさる宋の東福寺主乃子とも似ることりなり

あり則ち立て王となれば人淫暴にして位有
耶て後に先乃二王の妃妾なりしが妃妾と
なりその後「セイリユス」の一妾たりにこれ以て
変じて「スメルデス」に非ざる所知る因て乃来由を
識る問ふに果して一の妾男子なりて「スメルデス」有
りしがすなわちこれにそうに国臣に告げ因て兵
を以て襲てこれを殺す而して直の「スメルデス」を
錫よそ乃ゆゑ所を知らざる国人をなすもの「ダリウ
ス」を立て王となす「ダリウス」を「セイリユス」の女婿

なるべし孫にして百児西亜国第三世の大君とい
ふ「ダリウス」賢才にまして仁を施す国人悦服し
て威徳最盛なり遠辺諸国にまで兵威を震ふ
兵八十餘萬にして歐羅巴洲の界に至まり
「ダリウス」若くその太子「セルセス」位をつぐ「セリセ
ス」は「ダリウス」の次子なりとかいへども其母を「セイリ
ウス」の女にして「ダリウス」の元妃なるが故に立て嫡と
ふ是より子孫相継て西洋の大君たり国富み
兵強くして世々威諸国に振へり九を統を傳ふ

ること十世二百十餘年にして厄勒寮亜国の帝王
「アレキサンデル」が破られて国亡びぬ此時西
洋周基第三千六百二十年の頃にして日本孝安
天王の六十五年唐土周の烈王の四十一年癸巳の歳
に相当るとかいふ
抑百児西亜国和蘭の人を呼て「ベルシイ」
又「ペルセン」といふ今亜細亜洲中に於て最有名
の大国なりしかども百児西亜をその後分て
中興せしのみなり

厄勒察亜王大君の説

馬則多泥亜王を其地「キリイキス」国の内東北にあるの地にて東を多島海にそそいでいる〜〜〜〜〜にして有名富饒乃王なり其始祖地「カラこユス」とゝふ罷皇嵯伊亜王の尚盛なりし時にあたりて此土地開きて こゝに王しゝ位地をゆ子「クウこユス」を生ふ「ソウこユス」左位十二年にして卒に其子「ゑリマス」立ち「ゑリマス」左位三十八年ありて卒す其子「ペルチキユス」立ち左位五十一年にして位地その子「アルセラウス」生ふ子孫相絶ゑ洲国に主しゝその後西洋周基三千五百九十四年前日本孝安天皇三十九年周の烈王の十五年丁卯にあたる「アレキサンデル」大王生る「アレキサンデル」大王その父地「ヒリピユス」といひし祖を「アメサンタス」といふ並びに馬則多泥亜王の王なり妃を「オレイムピアス」といふ「エピロス」又キリイキス」王の地「マセドニア」の西にあたりの内「モロツセルス」王王「子オプトレミイ」の妃なりこゝ歳八月第六日「デンクズスダツク」火曜日を以て馬則多泥亜の王京「ペルラ」の地 此地今名「シユキリア」と云「リロこフキ」とゝる海湾こ

地キ地ニ より 於て 生るこれ 即すなわち「ヒリピユス」王即位の
第五年にして西洋中興革命そのうつたえを起すの時を去ること
三百五十四年 ゐ羅馬ロマ 王 岡墓 後第三百九十七年
百児西亜ペルシア王「カキユス」の世に 行こり 泄爰 尼エ 弗
俗ゾク 国に 所在の「デアナとり」ゐ 神女の廟 尼弗俗国
もゐ亜細亜の内に 属すこの 祠庶 まく 天下七奇の 其一なり 拂フ 郎ランス 黛
ゐの「ミリン」とり〳〵る 行く 多ほとんどの 意太里亜 紀り 書のけに 尼布俗こ
て 発見し「デアナ」の 像 なるその 像女身にして 甲冑の 如き 自ゐ 火 出ゐ
ものを 著て 上に 種〳〵の 図畫 ありあまこと 日月 ゐ 輝る
して 崇上すこれより さ 紀に 神女その 祝師に 告
ていとく 我が 祠 自ゐ 焚らるの 日に 行くまして 一の 英

傑の王世に降誕して東方諸国を破滅すべしと
果してその言ふところの如し「アレキサンデル」生れ
て神霊にして大徳 行を後の史書 これを尊び
「ヒダニユム」まく「ゴロオト」とり「マ久ニユム「ゴロオト」共に大こい
て英賢を 加へてこれを尊むここの「アレキサンデル」
ゐ姓るとり又 指すること「アレキサンデル」
まく以てこれを名くこれ 彼国むこうを 俗ゾク 実覚 知言 和蘭国の 使
ゐ生子則 以前世大人 偉者 名字 命 こと 行るまく この 教 ゐり
年十八 ゐして父の王にまく ごとく「アテエ子」 玉 織
を「アテエヨン」はその地「マセ「アレキサンデル」自ゐ一陣にすく みく
ドニア」玉乃南に 行り
相戰ふに敵陣 挫け 靡きて敵 てこれ 敵する

者あり「マセドニア」の兵これを率ひ進みて遂に大に「アテエネ」の兵を破りて斬獲六千餘級「アテエネ」國遂に降服す「アレキサンデル」性闊達よく將士を愛し施を好む凡そ物を得ることにこころざしを農に厚賜して敢て身を惜まず此時百児西亜國を世〻西洋諸國の大君にして地廣く兵盛んなりしかども庫の富はなほ少くして百児西亜の人曾て馬則多泥亜より來る者ありて「アレキサンデル」が奪ふ能はざるを見て

是を以て益々いよ〻凡そ國々庫富むにならんを欲せざる君の庫をしていづれの所にかあらや「アレキサンデル」答へていはく我庫いま親友將士の心にあるなり百児西亜國の人その答を異あるとして年二十にして「ヒリピユス」王病て死す則ち位を嗣ぐ「いくをくもなく」して「タラシア」「プラコオ」「入尓馬泥亜」等諸國と戰てこれに勝ち「タラシア」國王「レイスマキユス」を斬る「タラシア」を今の「キリイキス」の内「ロヲマニア」の地「テベン」國を攻め敵「ロウ」罷「パ」洲東南諸國を降るに

毒をもして兵威日に盛なりて亜細亜洲の地我
蠶食す百児西亜(ペルシア)の王「ダリウス」コドマンニエス」これ故
憤む則ち百児西亜國中「メレノレ」「ロデイセル」等の地
の兵歩卒千餘萬騎士一萬餘人を發して是を
擊にしむ「アレキサンデル」兵少なくこれを迎戦す
百児西亜の兵多きこと数倍なりして馬則(セド)多泥(ニ)
亜の兵やゝ怕るゝ色ありてもでに圍を受人とす
「アレキサンデル」もおもちに自ら兵器を執て矢石
を冒して敵陣に入る左右これを止めていはくい
事もでに危し暴をやゝ退て身を免忘し「アレ
キサンデル」のいはくゝ汝等いまを我が親友なり既と
なり事こゝに至る生死同じすべし家なんぞ親
友を捨てゝひとり身を全せんやとこゝに於て士
卒をして奮撃して百児亜(ペルシア)西亜の堅陣を冲て遂に
大にこれを破り首級斬ること二萬餘級傷痍の
数もまゝこれを称ふ此時馬則(セド)多泥(ニ)亜の大將九人
士卒二千餘人戦死す「アレキサンデル」憲くその屍
を求めゝこれを葬を碑を建て其功を録し

を内遺を布の老幼孤撫育すこれ人ようを以て衆心感激して為に死力戮を「レイニイン」「パムペイリア」二侯四方分び「コレイジア」亜を経る洛附西方羅馬「ラテン」等諸国併を結ぶ兵連なる事数年なり「アレキサンデル」これ故和論を諸国と為これ人ようを以て西洋開基第二千六百一十七年に日本孝安天皇六十二年周ノ烈王三十八年庚寅に当る百児西亜四王「ダリウス、コドマニユス」大ゆ兵を興して歩卒四十餘萬騎士十餘萬人を以て自ら将として「キリイキス」を撃ち

地志ヲ按スルニ「シリシイン」ハ小亜細亜ノ西ノ辺ナリ

地附「アレキサンデル」をでに「シリシイン」国を攻平ぎて境内の農地悉く「セリイ」四の「メラロス」山を経てこれを拒く百児西亜国王衆を傳して備を設けを平原ゆ兎く士卒を怠慢セを「アレキサンデル」すなわち兵をひきその不意あいて掩ひ撃て大にこれ故破る百児西亜の兵皆潰散して死する者十二萬人百児西亜国王僅に単騎して走を免れ去るこれにより百児西亜国王恒に所駕の宝車あらび所佩の宝弓故

得きゝその王の母かゝび愛妃子女共得ゝ王「ア
レキサンデル」ゝゝこれ共輕慢せに禮以て厚り
これ共養なふ遂に勝に乘じて その都共攻メ
反を所得乃儲蓋珍宝きめゝ駿しゝ色より王
ゝして小亜細亜の喜畧亜、葛八多西亜、那多里亜
亜馬西亜尼弗俗業の諸國を攻伐せ地中海の
諸嶋共降ゝ西利亜の諸国共破り「テイリス」國
を滅ゝて弗尼祭亜国を降す 加德亜國王かゝび
その國都「アレサレム」城の僧侶の主等みな

帰順朝謁ゝて宝を献すこゝに於て地方廣大
ゝゝて歐洲瞰得何共以ゝ百児西亜國と異共
分ち其近傍一等の諸侯皆降る百児西亜國王
志ゝ敗れて封疆日ゝに減ぜられると見ゝ其
怨ふたゝそその國中に令ゝて大ふ軍器共造り
諸將と議ゝて大ふ兵共興ゝまゝ韃靼・是的亜
等諸国の兵を招集ゝ歩卒八十餘萬騎ノ士三十
餘萬ゝ甲備足ゝて軍容きめゝ盛なり「ア」
キサンデル」もまゝ諸國の大軍を帥て歐洲瞰得

河ニ至リ戰ヒ交ユ百児西亜の人尚度々志モ敗ミ辱を反るを憤リ「キリイキス」を殲滅セんとして其鋒甚鋭し「アレキサンデル」をなを奇計を廻らして精兵を方てその後に廻リ出テ前後相應じてその中軍を衝て惑くこと甚敵破り首級斬る事九萬餘級その他死する者勝て計ふべからず甲冑拾て兵器解て四方に潰乱す馬則多尼亜の騎將「パルメニオ」なる者驍勇絶倫なり北ニ走るを追て百児西亜王「ダリスコドマンニエス」を殺敵仆て刺殺すこゝに於て「アレキサンデル」大ニ勝利を得て「タリウス、コドマンニエス」の屍を王者の禮を以て厚くこれを葬る其騎將を重く賞しこれより兵を進めて東方諸州攻破りてその明年に百児西亜の西部「ペルセポリス」城を拔てその國を滅し西洋大君の業に代る其地に於て大に射猟をなし獅子虎豹戰を獲る事その數凡そ萬を以てゆきて南の方

亜弗利加にむかひて阨入多国を平ぎ其地より大
城を築くこれ今のアレキサンデリア城これなり
次て利未亜国を降して黒人国の界にいたりて
乃地を開く後また大軍を以て天竺印度国を
攻破りて印度の総国を掩にしその他の印
度諸国を破滅して東の方安日河に至りまた
兵を収めて本国に還れり威徳四海を乃で西も
欧羅巴の諸王国南は亜弗利加洲の黒人諸国
北は韃靼・是的亜・諸国にいたるまでみな朝貢し

て方物を献ずすなわち帝都を「キリイキス」国と
建てその子等功臣を諸国に分ち封じて王となす
これ西洋開基以来英雄の帝にして
その度きことまた古今比なしとぞいふこれ
統を傳ふることおよそ二百八十餘年ありて羅
馬の国威徳隆盛にして「キリイキス」代りて雄を
西洋に称ぶ

羅馬国大君の説

羅馬国拂蘭寮の人を「ロツメ」といひ和蘭乃人

「ロヲメン」とゝなゝその地意太里亜(イタリア)國の中央に位置し
地白里(ナベリス)とゝ〳〵称し大河にのぞみ古くして天下有名
の上國なゝその開基の始祖を「ロムリユス」とゝふ幼
稚の時に其父母離れ行方知れず「ロムリユス」と
その第「レミユス」との二人共に地白里河にもてあそ
ばれるあや二人の小児なれども天の加護ありて流れに沉まず時よ一箇の羊牧ふ「ハカス
」とゝふ人ありこれを見て甚だ奇異
なりとゝてその凡人に命じて捕へ則ち扱し
上げて家に帰へしこの児育てその成長を俟
に乃ち英才人に越えよく衆を懐集し遂に
此國を開きて王となり法令制度よく備りて
その「ロムリユス」の名よりして西洋羅馬(ロヲマ)と稱
すゝこれ「ラテン」國第十二世の王の時に位をてす
なわち西洋開基第三千一百九十七年なり
唐土周の幸王の二十年庚寅に当る
こゝに羅馬國開基の元年と称し
来ること凡一方の王國しるのみ其後此國主
「ジユリウス・カアエサル」なる者の所敬て敵する

布あり入尓馬尼亜「レイン・ランド」「カッリア」今の佛蘭西
「ヘルヘシア」伊斯把伊亜諸国地臣服して威徳
日月聖人りその後遂に「キリイキス」を信せ
り歐羅巴総易一統の帝となりこれ西洋開基
第三千九百零二年の事なり日本崇神天皇の五十二年漢の元帝細元三年乙亥の初
然後統治傳ふること二百五十餘年にして
その国大に乱れ諸侯戦争絶ず
其時甚帝「コンスタンチユム・マグニユム」なるもの
「コンニユス」は大きなる
にその道上にあり
英雄賢才の主にして憲

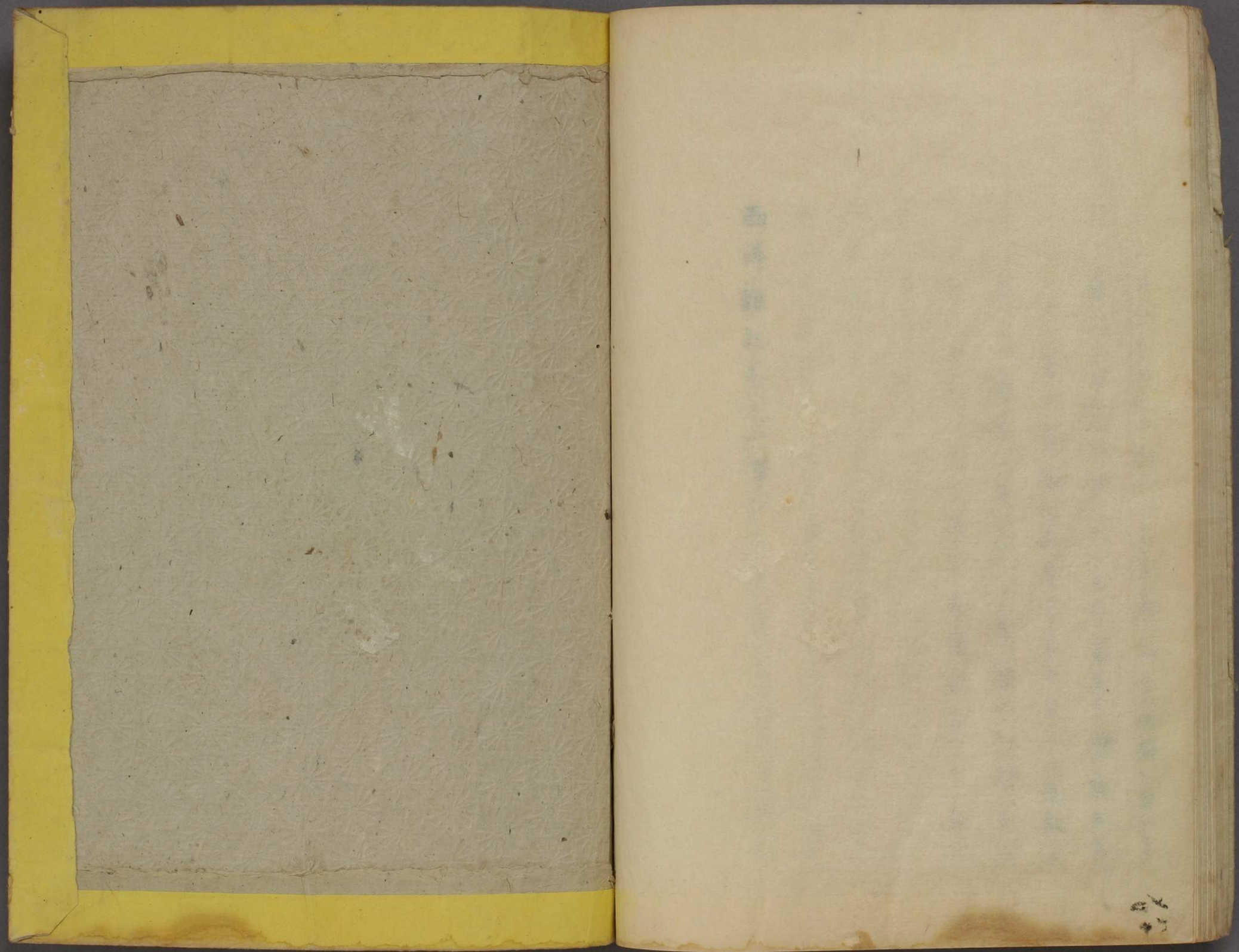
諸僭偽の主地追討し羅馬の帝豊後中興
し諸列の大乱地平定し亜細亜・亜弗利加
諸国をなと邑に臣服すこに於て新に大城を
「ダラシア」国に築き「クラシア」地改めて「ロクマニ
ア」又新羅馬と号しその城を「コンスタンチノツ
ポラル」と名くこれ地以て東都と号し古の羅馬
を西都と号す然帝をなもぐ文学地好み東都に
書堂を建て書地積む事二十萬冊に及ぶ地帝
の母后も甚賢徳にして帝と共に古聖を慕

し賢者多くして賢女の名世に著るしてその
後五百年にして「カアレル・コロオト」帝の世にい
たりて「ゴロラト」大きくその道上るゆ西都城入尓馬陀亜西の「左
子」の地に遷してもって大都城築き古の羅
馬の都をも教化王所居の都となす帝に
「五子」に遷るも尚今に至て称して羅馬の帝と
いし入尓馬陀亜四の別名城「ヘイリゲン」・ロオムセ・「イ
キ」と号し羅馬聖國といへ仁義なりその地城分
て十道となり百官法制全備して政化大に施し

歐羅巴州に学校設置人士教導寛
仁時よりして盛んなりとすまたまた七属国城おのおの帰
して羅馬帝の輔政七官をもうしこれ名方地なり
てその国政治め相共に掌る所の職にして帝城
輔けて政治行なうこれを「ラテン」語に「エレキトレス」
といし和蘭語にて列クルポルスト」とりしそのセ国
を「メンツ」を入尓馬陀亜西の法教を主とり「テ
リイル」を「アレテト」国の教をもとり「ケラレン」を
意太里亜西の主とり「ホヘエメン」を貢献礼法の

多城主とり「ベイエレン」を賦税供食の事を
主とり「サキセ」を兵馬征をの多城主とり「ブラ
ン・ブエルク」を財貨宝庫乃多城主と保近世よりを
して「パルツ」ブロンス左イキ」の二城加へて九宮
とあどしふ而して今城去ること三百餘年前より
東都「コンスタンチノポル」城を都児格回にう
でもれ多きども入尓馬泥亜の帝都を今に至て
隆盛富饒にしてその廣大美麗なること紙筆
よ陸すべかゝぶ北邏馬「左子」両都の事

然火畧ハ予訂正増譯未覧異言の中に記す
故にこゝよ贅せぶ元を昔時「ロムリユス」邏馬の
鳴業城開きしより今茲辛酉ゝ保まで
合て二千五百五十三年におよふと云
頭に抽こ「メンツ」「チリイル」「ケツレン」の三を教官の
長にして他ハ三生政官の長なを今に至て入
尓馬泥亜国中諸侯君長天に帝畿の地に會
を風の時ハ先て此時政令法議〳〵法教を布
き物城考撰して官を授〳〵とりふ「ヨシユア」

オツテンス」が所刊の万國細分地圖の内にまゝ
詳にこの事紙記しとその圖ゟ之輔國九度
い上に坐し各國の諸侯を左ゟ坐し法教を
主るの諸官ハ右ゟ坐し帝叢の別郡を治
るの寺令ハ下に坐す其順次悉く定る
ゟ之

西洋雜記巻之一畢